２年ぶりに歩いた道

星槎国際高等学校　帯広学習センター　２年　吉田　一貴

あの道を歩いていた頃は、記憶に残そうなんて一度も思っていなかった。ただ通って、ただ見ていただけ。その道を２年ぶりに、散歩してみた。目的があったわけじゃない。ただ、なんとなく、時間があったから歩いてみようと思った。前は毎日のように通っていた道だった。通学の途中で考え事をしながら歩いた道。急いでいる日は民家の間を抜け、何も考えていない日は、ぼんやりと歩いた道。一度クリアしたゲームをもう一回やっているような感覚だった。

何も変わっていないと思っていた。しかし、実際に歩いてみると、少しずつ違っていた。直売所の前にあった自動販売機は残ってはいたが、ジュースの種類も料金も上がっていた。当時は、学校帰りに飲み物を買ってはいけないことになっていた。自分でも分かってはいたが、正直に言えば、こっそり５００円玉を持って行って、コーラを買っていたこともあった。誰にも見られていないか気にしながら、自販機の前に立つ時間が少しだけ楽しかった。今回も、喉が渇いていたので、同じようにコーラを買おうと思い財布を開いたがすべて１円玉で７円しか入っていなかった。買えない理由がルールではなく金額だったことが、余計に納得できなかった。

道沿いの家にあった植木も前より伸びていた。こんなに葉が多かっただろうかと思いながら見上げると季節のせいか、色も少し違って見えた。季節の風景と、目の前の景色が微妙にずれている感じがした。フィフィフィという鳴き声がした。僕は鳥が至近距離にいると関心を持つ。覗き込むと、枝の上にゴジュウカラがいた。

歩きながら、頭の中で「ここは変わってない」「ここは違う」と、勝手に比べていた。段差に位置は同じなのに、前より浅く感じた。道幅も同じはずなのに、少し広くなったように思えた。自分の体のほうが変わったのかもしれない。

少し進むと、小さいペットボトルの白湯がなぜか道の真ん中に捨てられていた。キャップもしっかり閉じていた。白湯を選ぶ繊細さと、それを豪快に捨てる雑さ。その二つを同時に持っている人が、この近所にはいるらしい。その光景だけは妙に頭から離れなかった。

変わらずに、汽車がきれいに見える場所があった。踏切でも駅でもないのに汽車がちょうどいい角度で通る。昔、撮り鉄らしい人が立っていることもあって、どんな電車を待っているのだろうと思いながら横を通った記憶がある。今回は汽車を待ってみた。僕は写真を撮るわけでもなく、一瞬だけ汽車を見た。たぶん、汽車を見ていた時間より、通り過ぎた後の景色の時間のほうが長く見ていた。

２年ぶりに歩いただけで、どれも大した出来事じゃない。何かが起きたわけでもない。それでも時間が経ってから振り返ると、思い出すのは、こうした何気ない瞬間ばかりだ。記憶は、残そうとして残るものじゃない。あの道を歩いていた頃の僕が、何も考えずに見ていた景色が、今になってようやく記憶になり始めている気がした。